

スペイン領フィリピンにおけるカトリック信仰

—— スペイン植民地支配とカトリシズム ——

菅谷成子

フィリピン共和国 (Republika ng Pilipinas)

人々・言語・宗教

人々：広義のマレー人

言語：オーストロネシア語族西部語派フィリピン語群

国語＝フィリピン語 公用語＝フィリピン語、英語

8大言語（イロカノ、パンパンガン、パンガシナン、タガログ、ビコラノ、セブアノ、ワライ、ヒリガイノン）＋タウスグ、マラナオ、マギンダナオ等

宗教：キリスト教・・・90%以上

カトリック 約85%

プロテスタント

イスラーム・・・4%、6～8%（ミンダナオ島、スールー諸島）

☆主なフィリピン・ムスリム：マラウイ族、マギンダナオ族、タウスグ族、サマ族

アニミズム（精霊信仰）・・・山岳少数民族等

南部イスラーム社会・内陸山岳地帯など（実質的にスペインの実効的支配の外であった地域）とカトリック化された地域の確執（モロ民族解放戦線、モロイスラーム解放戦線などの活動）

1 スペイン領フィリピン諸島 (1565-1898)

スペイン人がフィリピン諸島の存在を確認したのは、マガリャンイス（マゼラン：1519-22、ポルトガル人）がその西方航海の途上、1521年にグアム島（マリアナ諸島）を經由し、フィリピン諸島に到達したことによる。マガリャンイス自身は、セブ島に隣接する小島、マクタン島で現地の首長ラブラブとの戦いで死亡したが、その部下が世界一周航海をなすとげ、スペインに帰りついた。

マガリャンイスは、フィリピン諸島をサン・ラサロ大群島と名づけたが、西方航海によって到達されることから「西方の諸島 (Las Islas del Poniente)」とも呼びならわされた。

スペインは、1529年にポルトガルとの間にサラゴサ条約を締結して、フィリピン諸島を確保した。

「西方の諸島」から「フィリピン諸島」へ

1542年のビリャロボス遠征隊は、フィリピン諸島の占領を目的に派遣された。メキシコ西岸を出発した遠征隊は太平洋を横断して、サマル島からレイテ島に到達した。その折、これら両島は、当時のフェリーペ皇太子（後のフェリーペ二世）に因んで、Las Islas Filipinas（フィリピン諸島）と名づけられた。その後、この呼称が諸島全体を指す名称となった。

ビリャロボス遠征隊の任務の一つは、フィリピン諸島をスペイン領として確保するにあたって不可欠の、太平洋を横断してメキシコに戻る航路を発見することであったが、これは達成できなかった。

1565年、遠征隊を率いてフィリピン諸島に到達したレガスピは、セブに根拠地を築くと同時に部下を太平洋横断帰路の発見に向かわせた。その結果、スペインは、フィリピン諸島とメキシコを確実に結びつけることに成功し、スペインによるフィリピン諸島の植民地化が開始された。

レガスピは、1571年に、ポルトガルの妨害や住民の抵抗と食糧確保の困難を背景に、中国貿易の利を求めて北上し、土地の首長を降してマニラ市を建設した。これが恒久的なスペインの植民地首府となった。

2 スペイン人来航時(1570)のフィリピン諸島住民

その当時、低地フィリピン諸族は一般に、バラングイという大小の社会集団を構成して生活していた。これは、ダトと呼ばれる統率者(首長)の親族、姻族を中心とする小規模な社会集団で、数戸～百戸程度規模の自給自足的な社会で、ある一定の階層分化が進み、ダトらの有力者、自由民、隷属民の区別があった。これらの間には主従関係が存在した。

また場所によっては、複数のバラングイからなるバヤンと呼ばれる比較的大規模な集落が存在し、ある程度の政治統合がみられる場合もあった。

マイニラ「首長国」(マイニラ:Maynila/インディゴの繁茂するところ)

現在のイントラムーロス付近には、1500年頃にブルネイの王族との姻戚関係によって成立したと考えられるマイニラ「首長国」ともいえる政治的統合がみられた。マイニラ「首長国」を率いていたのはイスラーム化した首長アチェ(ラジャ・マタンダ)であった。

マイニラ「首長国」は、ボルネオとの頻繁な人的・物的交流があった。ボルネオ船は、刃物、刀剣類、樟腦、香水、サゴ製品、ジャワ製バティック、インド製綿布(チンツ)、宝石などをもたらし、諸島各地へも寄港した。

一方、マイニラの対岸(パシッグ川右岸)のトンド地区には、ラジャ・マタンダのいとこ、首長ラカン・ドウーラの支配下にあった。ラカン・ドウーラは、バイバイ(現サン・ニコラス地区付近)に中国人居住区を設け、福建から年に2・3隻訪れる貿易帆船との交易を独占していた。

これらの中国船は、陶磁器、土器、絹・木綿織物、ビーズ、錫、真鍮製品、鉄製品、鋳物、日常雑貨などをもたらし、金や棉花、蜜蠟、シナモン、鹿皮、水牛の角、蘇木などの諸島各地の物産と交易された。これらの物産は、マニラから福建を初めとして、周辺地域に輸出された。

日本人もまたスペイン人のルソン島到達以前から、マニラ付近、ミンドロ島、ルソン島カガヤン川河口や西岸リングエン湾のアグノ川河口などに来航し、日本銀と金や鹿皮、蜂蜜などと交易していた。

3 スペインのフィリピン支配

スペインの支配を正統化する原理:

新しく獲得した領土の住民(インディオ)に福音を伝えること=カトリシズムの布教

スペインの植民地支配の特徴は、世俗権力による支配がカトリック教会による支配と相補的な関係にあった点に求められる。

スペインでは、16世紀初頭以来、インディアス支配の正統性をめぐって種々の論争がなされてきた。

その結果、スペイン国王の「新発見の土地（インディアス）」の住民に対する統治権は、住民がローマ教皇の權威を認めること——その代理としてのスペイン国王の支配とカトリシズムの受容に同意すること——により生ずるとされた。

すなわち、スペイン国王は、ローマ教皇の權威の世俗世界における代理として、「パトロナート＝レアル（インディアスにおける国王の教会保護権）」を行使し、カトリック教会組織を維持する義務を負うことになった。スペイン国王は、その財政的裏づけとして十分の一税の徴収権が与えられ、その教会の保護の見返りに、インディアスにおける聖職者の推薦権などを有した。

フィリピン諸島では、さらに、スペイン国王は、カトリシズムの伝道事業を維持するという前提で、その地の住民が自発的に国王に服すれば、その住民に対する支配を正統化できるとされた。これは、1597年にフェリーペ二世によって確認され、その後の約300年にわたるスペインのフィリピン植民地統治の根本方針となった。

スペインの論理からいえば、インディアスの住民がカトリシズムを受容することは、それら住民の意図とは別に、その保護者であるスペイン国王の權威に服することを意味した。また、住民がスペイン国王の權威を受け入れることは、カトリシズムを受容することに同意したのと同義であった。スペインは、これをもって、住民からスペイン国王への服従の徴として、貢税や労役を課することができる考えたのである。

フィリピン諸島における布教事業と住民支配

改宗事業は、主として、レガスピ遠征隊に同行したアウグスティノ会をはじめとして17世紀初頭までに来島した、フランシスコ、イエズス、ドミニコ、およびレコレクト会の各派修道会の修道士により担われた。

カトリック教会は、スペインの植民地行政を補完するものとしての機能を果たし、直接的に世俗の行政組織に関与し、植民地フィリピンを根底から支えた。

各派修道士は、1578年にマニラ司教区が設置されて以後も小教区主任司祭として、土地の言語を習得して各地のプエブロ（町：小教区とほぼ一致）に定着して教区住民の司牧（住民にその教えをひろめ、カトリック教徒として義務などを教え、日常生活を導く）にあたった。それと同時に、彼らは住民の前に、ほぼ唯一のスペイン人として、植民地権力を顕現する存在であった。

すなわち、教区主任司祭は、洗礼、結婚、終油などの秘跡を通じて教区住民の動静を把握し、住民に課せられた貢税の徴収額や労働徴発の実施状況を確認し、町長やその他の町レベルの官吏の選出などにあたっては承認権を行使した。これらを通じて、教区主任司祭は、プエブロの統治行政を監督し、世俗の植民支配をプエブロに貫徹する役割を果たしていた。

プエブロには、カベセーラまたはポブラシオンと呼ばれた中心街区があり、そこには小教区教会、プラサ（広場）、町役場などが置かれていた。カベセーラの周辺には、その規模によってバリオやシティオと呼ばれた多数の集落が散在していた。

スペインの支配下の諸島住民は、できるかぎりカベセーラの周辺に集住することが求められた。その結果、自立的なバラングイから成っていた現地社会は、プエブロを最下位の行政単位とするスペインの統治機構へ組み込まれることになった。

4 「カトリシズムの逆説的機能」

カトリシズムは、植民地化の初期にあたっては、上記のように精神の面においても実生活の面にお

いても住民支配の道具として機能した。

しかしながら、諸島住民がカトリシズムを自身のものとして受容し、自身で解釈するようになると、次第に「あるべきカトリシズムの世界」という観点から、スペイン植民地支配の下での現実との乖離を自覚するようになった。すなわち、カトリシズムが植民地下の住民に対して抵抗する論理を与えることになったのである。これを「カトリシズムの逆説的機能」という。

18世紀初頭頃より、タガログ地方の住民の間で、四句節（特に聖週間）やその他の機会にパシオン（キリスト受難記：キリストの受難の生涯を五行詩形式で描いた長編叙事詩）を彼らの言葉（タガログ語）で詠唱する風習が広まった。さらに、この風習が次第に各地に広まり、各地の言語で詠唱されることになった。これはフィリピンのカトリック教徒のみに見られる独特の習慣といわれる。

このパシオンの詠唱を通して、人々はキリストの受難の意味を理解するようになり、表面的なカトリシズム受容から真のカトリック信徒へと内面的変化を遂げるようになった。彼らは、植民地下での自らの困難な体験とキリストの受難を重ね合わせ、現実世界での困難を克服するよすがとし、さらには、あるべきカトリシズムの世界を希求するようになった。

パシオンの論理による抵抗

パシオンの論理による住民の抵抗の例として、1841年の聖ヨセフ兄弟会（タヤバス（現ケソン）州でアポリナリオ・デ・ラ・クルスが主催した宗教組織）と植民地権力との衝突である「アポリナリオ・デ・ラ・クルスの乱」があげられる。

聖ヨセフ兄弟会は、教区司祭の指導を受けずに結成された信徒の組織で、会員を貧しい一般の農民に限って、プリンシパリーア（プエブロの有力者：町長やその他のプエブロレベルの役人など）や富裕な商人を排除していた。すなわち、聖ヨセフ兄弟会とは、貧しい人々——教会への寄付などが賄えないために救済への道を閉ざされていた——が祈りの生活に徹することで天国への道を目指した信徒組織であった。

聖ヨセフ兄弟会は、本質的に「あるべきカトリシズムの世界」を追求していたため、植民地支配を維持する立場にある教会や総督府によって徹底的に弾圧された。これに対してアポリナリオに率いられた信徒たちは、弾圧をパシオンに示される試練として立ち上がり、最終的にスペイン権力によって殲滅された。

その後、秘密結社「カティプーナ」が1896年に蜂起してフィリピン革命が開始された。彼らの思想もまたパシオンの論理が基底にあった。多くの民衆がフィリピン革命に共感し参加したが、彼ら民衆は、革命の意義をパシオンが示す世界像に基づいて理解した。彼らは、矛盾に満ちた現実世界をこの世の終末だと認識し、フィリピン革命運動をハルマゲドンの戦いと考えていた。

結局、カトリシズムは、当初、住民支配の道具として機能したが、長いスペイン支配の中で、次第にスペイン支配を受けた各地の言語集団を異にする人々を、信仰を通して結びあわせる機能を果たした。それによって「フィリピン人」意識も醸成された。しかしそのことは同時に、カトリシズムを共有しない、主としてスペインの支配を受けなかった南部のムスリムなどの諸島住民との間に亀裂をもたらすことにもなった。

5 人々のカトリック信仰：フォーク・カトリシズム

フランク・リンチの定義

（「フィリピンのフォーク・カトリシズム」ホルンスタイナー編 [1977] 所収）

いずれの組織宗教においても、公式、非公式、および民間信仰的な構成要素が共存している。すなわち、その信徒の行動と信仰の中には、正統な要素の他に、公式には規定も奨励もしていないが、ごく普通に存在している要素と、さらに、公式ではないうえに土俗の色合いの濃い要素が混じっている。

すなわち、カトリシズムは、もっとも広義に解釈すると、「正統の信仰や慣習から、“正統とは関わりなしのこじつけ”や、“それらしい見せかけ”や、“名前と形式だけを借用した”信仰や慣習までを含むもの」の総称である。

フォーク・カトリシズム（民衆カトリシズム）は、非公式の黙認、不許可、非難の3カテゴリーを含む。たとえば、フィリピンでは、サンタクルーサン（5月に行われるフィエスタ／祭りで、キリスト処刑の十字架を捜し出したとされるローマ帝国のコンスタンティヌス帝の母、聖ヘレナを記念する）、パバサ（パッションの詠唱）、ウンドラス（11月1日の万聖節）、教会非公認の教父母システムの延長型のコンパドラスゴ、ラマイ（通夜）、パダサル（埋葬後9日間の祈りの期間）などが具体的な実践例としてあげられる。

これらは、スペインの民間信仰を母胎にしたもの、先スペイン期の精霊信仰や親族組織などにに基づく習慣などがカトリック信仰の一部として人々に認識され、実践されているものである。それらに関する行事や儀式は、公式のものより、人々に重視され、熱心に行われる場合が多い。

フィリピンのフォーク・カトリシズムは、スペインと中南米の双方から移植され、さらにフィリピンの風土の中で変化したものといえる。

参考文献（入手しやすい日本語単行本）

<事典類、入門的なもの>

鈴木静夫、早瀬晋三編『フィリピンの事典』同朋舎、1992年。

石井米雄他監修『東南アジアを知る事典』平凡社、1986年。

滝川勉編『新・東南アジアハンドブック』講談社、1988年。

綾部恒雄、石井米雄編『もっと知りたいフィリピン、第2版』弘文堂、1995年。

池端雪浦、生田滋編『東南アジア現代史II、フィリピン・マレーシア・シンガポール』山川出版社、1977年（1版3刷、1992年）。

大野拓司、寺田勇文編『現代フィリピンを知るための60章』明石書店、2001年。

寺田勇文「フィリピンのカトリック」『文化人類学』3、アカデミア出版会、1986年。

寺見元恵編・監訳『フィリピンの大衆文化』めこん、1992年。

メアリー・ラセレス・ホルンスタイナー編『フィリピンのこころ』山本まつよ訳、めこん（文遊社）、1977年。

宮本勝、寺田勇文編『アジア読本 フィリピン』河出書房新社、1994年。

<やや専門的、専門的なもの>

池端雪浦『フィリピン革命とカトリシズム』勁草書房、1987年。

——「聖ヨセフ兄弟会とタガログ社会」『歴史のなかの地域』（シリーズ世界史への問い8）、岩波書店、1990年。

——「フィリピンにおける植民地支配とカトリシズム」石井米雄編『講座東南アジア学4 東南アジアの歴史』弘文堂、1991年。

——「フィリピン国民国家の創出」同編『変わる東南アジア史像』山川出版社、1994年。

小葉田淳『金銀貿易史の研究』法政大学出版局、1976年。

シトイ、ウクール、チャイワン、モウ『アジア・キリスト教史2』教文館、1985年。

清水展『文化のなかの政治——フィリピン「二月革命」の物語——』弘文堂、1991年。

寺田勇文「外来と土着——フィリピンにおける民衆カトリシズム世界——」前田成文編『東南アジアの文化』（講座東南アジア学5）、弘文堂、1991年。

アントニオ・デ・モルガ『フィリピン諸島誌』神吉敬三、箭内健次訳、大航海時代叢書7、岩波書店、1966年。



講 義 風 景 (2)